

## 一橋大学

経済や政治の分野で世界的に活躍できる人材の育成に注力する一橋大学には、学生のニーズに応じた多彩な留学プログラムが用意されています。国際教育センターで留学希望者たちの指導にあたる阿部先生と、1年間の派遣留学や5週間のスペイン企業派遣留学に参加した学生にお話をうかがいました。



■ 南忠宏 さん



■ 阿部仁 先生



■ 伊藤一成 さん

### 一橋大学の留学制度の特徴を教えてください。

#### ■ 阿部先生

本学で最も多くの学生が利用している留学制度は「派遣留学制度」です。こちらは本学が学生交流協定を締結している海外の大学と1年以内の期間で学生を相互に派遣し合う交換留学です。毎年100名以上の学生が協定校への留学をしています。しかし本学の協定校は高い英語力を求めているところが多く、基準のレベルをクリアするのが難しい学生が多いのも事実です。また海外での実践経験がないまま、1年程度の留学に行くことが不安という学生もいます。そのため派遣留学に向けて、英語力等の必要なスキルを磨き、ステップアップしていくための仕組みが用意されているのも本学の特徴のひとつです。

学生たちの海外での対応力を向上させるため、短期の留学プログラムをスタートさせたのが2005年でした。派遣留学のための準備プログラムとして、エントリー編である「海外語学研修」とステップアップ編の「短期海外研修」を実施しています。「海外語学研修」は、長期休暇中の3週間程度を利用してアメリカやイギリス、オーストラリアなどへ行き、英語を学びながら現地の方々と交流しましょうというもので、他の大学でも同様のプログラムを実施しているところはたくさんあります。

ステップアップ編に位置づけられる「短期海外研修」は本学ならではのユニークな留学プログラムといえるでしょう。この研修は、語学力はもう充分足りている、でも派遣留学に行く前にステップアップとなるような体験がしたいという学生を対象としています。海外企業へのインターンシップに参加したり、現地大学の学生とフィールド調査を行うなどの参加型のプログラムが用意されており、5週間という短い期間で日本ではできない新たな体験をすることを目的としています。

このようにエントリー、ステップアップ、派遣留学と段階的な留学プログラムを組んでいることが



本学の留学制度の大きな特徴ですね。

■伊藤さん

僕はそのステップアップにあたる、短期海外研修のスペイン企業派遣プログラムに参加して帰国したばかりです。今年の8月からはイタリアへ派遣留学に行くことも決まっています。

■阿部先生

伊藤くんは理想的な形で留学制度を利用していますね。

■南さん

僕はエントリー編の海外語学研修と派遣留学に参加しました。

留学先などで他大学の学生と関わる機会もあり、一橋大学の留学制度の特徴って何だろうと考えていたのですが、そのひとつとして経済的な支援が大きいということが挙げられると思います。派遣留学のときは現地大学のための授業料はゼロでいいということになっていますし、保険や渡航費、生活費などにも100万円ほどの給付型の奨学金が出るんです。

■阿部先生

派遣留学に関しては、参加する全学生に対して本学のOB・OG会が後輩たちのためにお金を用意してくださっています。派遣留学の選考は、この奨学金のための選考でもあるんですよ。派遣留学では現地大学への授業料は必要ありませんが、アメリカでの1年間の生活費は200万円ほど必要となります。そのすべてを奨学金でカバーすることはできませんが、先輩方の志は大変有り難いですね。本学の卒業生たちは愛校心が強いですし、企業などで重要なポジションに就いているかたが多い。そういう方々は現在の日本社会が進んでいくグローバル化の道を実感しているのでしょうか。仕事では海外に行ったり、諸外国からやってくる社員たちと対等にやりあう場面も多く、まさにグローバルな現場がある。それを学生のうちに体験しておいてほしいということなんですね。この奨学金制度は1970年代ごろから続いているんですよ。

## 大学として留学によってどんな経験をして、どんな成長をしてほしいとお考えですか。

■阿部先生

社会的に求められているのは、グローバル人材を育てること、になるのですが、教育者としては学生自身が一番自分の能力を発揮しやすい職や生き方を教えることだと考えています。それはどんな物理の先生でも生物の先生でも、どんな分野の教育者でも言えることでしょう。たまたま私は国際という舞台でそれをやらせてもらっているのです。留学をすることによって、今まで経験しなかったことに会い、従来のやり方が通用しない場面にも遭遇する。そこでフラストレーションが溜まったり、解決を自ら考えていくことになるはずですよ。それはライフスキルを磨くということだと言えるでしょう。一橋大学の学生は目標を設定してそこへ突き進む力が強い。問題を定義したら解決に向けてさまざまな手段を考える能力に長けています。その力があることはいいことなのですが、必ずしも思ったとおりに上手くいかないこともあるし、目標を見失ったり、目標が変化していくこともこれからは出てくるでしょう。そんなときに何でもやってみよう、取りあえずチャレンジしてみようというアプローチの仕方を教育者としては学生たちに伝えていかなくてはならないと思っています。とくに就職する前のこの時期に。そうした経験をするには、留学や海外経験がとて役立つかはわかりませんが、役に立つはずですよ。

## 想定外のことが起こる場へ入ってみる、ということですね。

■阿部先生

そうですね。想定が崩れたときにどうするの、と。そんなときに別な視点から問題を考え、取りあえずやってみよう、新しいことを見つけていくことができる、そんなことを留学を通じて学んでほしいと思っています。

## お二人が留学をしようと思ったきっかけを教えてください。



### ■伊藤さん

僕は短期海外研修としてスペインの企業で5週間のインターンに参加しました。このプログラムに応募したきっかけは、一橋大学の寮で海外から来た交換留学生のサポートをしていることにあります。周りにたくさん留学生が住んでいる寮で暮らして、彼らの日常をサポートする立場にあるので、普段から英語ばかりの中に暮らしているん

です。そこで実際に海外に行って英語を使ってみてみたいと思ったこと、そして就職活動を前にして自分がどんな仕事をしたいか、どんな仕事に向いているかを知りたいと考えて、このインターンに応募しました。

インターンとして行った企業は商社で、配属されたのはファイナンスの部門になるのですが、自分が想像していた環境とは違って驚きましたね。自分の勝手なイメージで、ファイナンス部門の職場には男性ばかりだろうと思っていたんです。しかし実際は、男女も半々、オフィスの雰囲気も明るい。日本の企業から想像していたものとはかなり違ったんです。

同じ財務という仕事でも、国によって、会社によってその雰囲気は違うということに気づき、自分の見てきた世界の狭さを知りました。そして自分に合う仕事というのはすぐに決められるようなものではない、もっとたくさんの方を見て、もっといろいろな視点を知りたいという目標が変わっていきました。このインターンに参加して、世界がどのようにして回っているのか知りたい気持ちが強くなった、そう感じています。

### ■南さん

留学を通じて何かを身につけたいというよりは、まずは楽しいことをしたいと思った、それがきっかけです。ではなぜその楽しいこととして留学を選んだのかというと、大学2年の春休みに旅行でベトナムにいったとき、日本との違いに驚き、その驚きが面白かったということがあります。言葉も気候も食べ物も人間も違う。日本との差異を感じるのが面白いと感覚的に思ったんです。その後もバックパックでいろいろな国を旅行したり、3年生の夏休みには一ヶ月間ニュージーランドでの語学研修にも参加しました。インターンとしてカンボジアに二ヶ月半ほど住んだこともあります。その時、旅行と住んでみるの違いも感じ、もうちょっと長く住みたいと1年間の派遣留学に参加することを決めました。

ではなぜ留学先としてアメリカを選んだのかというと、アメリカって比較的新しい国で、さまざまな人種や宗教が混在しています。これほど多様性に富んだ国は他にないのではないか、そう思ったことがアメリカへの留学を決めた大きな理由です。勉強がしたいとか将来のキャリアに役立てたいという気持ちはあまりなくて、自分が楽しいと思える感覚を信じて行動していくことが、後々自分の糧になるだろう、それが留学という選択肢だったのだと思います。

### ■阿部先生

エントリー編である語学留学に関しては、現在は主に1年生が英語の授業科目として履修し、年間200人くらいの学生が夏休みを利用してイギリスやオーストラリアの語学学校へ行くというプログラムになりました。

1ヶ月くらいの語学研修では英語力に劇的な変化はないかもしれませんが。でも各国から留学生が集まっている語学学校へ行くことで、文法が完全でなくても会話はできるという自信はつくはず。ここで自信をつけてステップアップ編や派遣留学へと段階的に成長していってもらおうということがプログラムの趣旨ですね。

■伊藤さん

語学研修では英語力が上がったという実感は得られないと思いますが、間違っていてもいいから話す自信がきます。海外にいる限り英語は使わないといけない。間違えていてもどうにかしようとする、その経験ができるんです。現地に行けば日本人ではない友だちができる。そこで彼らと話すには英語しかないですよ。とにかく英語を使う機会が増えることが大きいと思います。

### みなさん留学にはどのタイミングで行かれていますか？

■南さん

僕が派遣留学に行ったのは4年生の8月から翌年の5月までです。また、当時はまだ試験段階だった語学研修にモニターとして参加したのは3年生の8月から9月です。

■伊藤さん

短期海外研修に行ったのは2年生の春休みです。派遣留学は3年生の秋学期から半年間を予定しています。僕のようなスタイルの学生が多いのではないのでしょうか。

■阿部先生

派遣留学は3年生にならないと行けないので、そのタイミングを狙って1年生の時から準備をしている学生が多いと思います。部活などの都合で4年生になってから派遣留学に行く学生もいますよ。

### 短期海外研修に参加した伊藤さんの体験を教えてください。

■伊藤さん

短期海外研修ではスペインの商社にインターンとして行きました。行く会社は最初から決まっているので、応募する時点で自分がどんな会社に入るのかわかっている状態で参加することになりますね。ただ会社で配属される部門は、あちらの企業の方が学生の学ぶ学部や適性を見て判断しているそうです。自分は経済学部ということもあり、ファイナンス部門への配属となりました。このプログラムには一橋大学から6名、あとは韓国の大学から4名の学生が参加し、ファイナンス部門以外に法務やマーケティング、人事、ITなど多様な分野をそれぞれ担当します。

一緒に参加した学生の中には就職が決まっている人もいましたが、自分は「仕事をするってどういうことだろう」というような気持ちでした。会社では学生一人ひとりにメンターとして社員の方がついて下さいます。そこでまずは自分の考えとして「仕事をするということが何もわからないから、一から教えてほしい」と伝え、タスクを与えられるところから研修が始まりました。その最初のタスクは、商社とは何か、会社はどうやって動いているのかを自分で調べ、情報をまとめ、そしてメンターの方に発表するということでした。その後はスキルに合わせて財務の仕事にも少し関わることができ、これも勉強になりましたね。

この研修で想像と違うと思ったのは、何か仕事を教えてもらうような経験をするものではなかったということでしょうか。手取り足取り業務を教えてもらうのではなく、与えられた課題を自分で考え、遂行していくスタイルだったのです。もちろん質問すれば教えてもらえる、でもメンターの方も自分の仕事を持っている。その中で自分がどう主体性を持って動けるかによって、この研修で得るものは変わってくると思います。

■阿部先生

事前のオリエンテーションでも、自分から動かないとダメだよって話をするのですが、実際に現場に行ってみないと「待っていても何も起こらない」ということが実感できないようですね。

■伊藤さん

仕事以外の場面で印象に残っているのは、一緒に行った10人のメンバーとの交流です。一橋大学から行ったメンバーも特に知り合いではない上に、加えて韓国からの参加者が4人。最初に顔を合わせたときは、5週間一緒にやっていけるのか不安でした。それが日を追うごとに少しずつ繋がっ

ていって、最後には一つのチームのようになれました。みんなで飲み会した夜も多かったです。

■阿部先生

キッチンがついたウィークリーマンションに、みんな一緒に住むんですよ。年によってメンバーがどれくらい仲良くなれるかは違うんですが、今年はかなり親しくなったようですね。日本人と韓国人がスペインに行って、英語で交流して仲良くなる。これがプログラムのテーマですから。教員がどれだけ「仲良くなれ」と言っても、本人たちが上手くやらない限り実現しないのですが、交流が上手くいくとこちらも嬉しいですね。研修のタイトルは『スペイン企業派遣』と言っていますが、企業でのインターンだけでなく、人との交流を通じて異文化を体験し、その中で自分らしさを発見することも大きな目的です。

私は教員としてプログラムの中間地点あたりで顔を出しますが、基本は学生同士だけでやり取りをしています。研修期間を終えて帰国する最後の日は、みんな泣いたりするんでしょうね。

### 南さんは派遣留学でどのような環境に行かれたのですか？

■南さん

アメリカのミシガン州アナーバーという、デトロイトからバスで一時間くらいの街に暮らしていました。ミシガン大学へ通い、寮に住んでいましたね。

アメリカという国を選んだのは先ほどお話しした通り。この大学を選んだのは応募する直前のタイミングで留学可能との知らせが出たんです。留学する大学は定員の範囲内であれば自分で選ぶことができるのですが、世界中から学生が集まる名門大学に行きたいという考えもありましたね。

■阿部先生

ミシガン大学は新しく開拓された協定校で、派遣留学の前例がなかったのでこのタイミングで南くんが行ってくれて良かったです。

### アメリカで暮らしてみて、現実と想像の違いなどはありましたか？

■南さん

まず驚いたのが、英語を話すスピードですね。オンライン英会話などを使ってトレーニングはしていたのですが、現地にいって最初のころは何を言っているのか早すぎてわからなかったほど。やっぱり行かないと得られない情報が多いんだなということを感じました。

また文化や生活のギャップとしては、アメリカの人ってセンシティブなことが多いんです。例えば性差別や食べ物などに対する考え方も、多民族国家ならではの複雑なルールがありそれに馴染むのが大変でした。日本だと気にしないで済むことも差別になってしまう場合がある。多様性には寛容ですが、差異に対してのアプローチで怒られることもあり、日本とは違うセンシティブさを目の当たりにすることが多かったです。



### 大学での勉強についての違いはありましたか？

■南さん

よく言われることですが、海外の大学は課せられる課題の量が日本に比べて圧倒的に多いですね。そのためついていくのが大変です。また授業の形態も違います。日本は座学の講義が多いですが、向こうでは小さなグループを組んで行う授業が多く、ディスカッションの機会が豊富に与えられます。英語が下手なのでディスカッションにも苦労しました。

**でもその中で発言していかないといけないんですね。**

■南さん

発言をすることで、ポイントが加算されていくのでみんな活発に意見を出します。でも取りあえず何か言った、みたいな意味のない発言をする学生もいますね。

**そんな苦勞の多い日々のなかで感じる面白さがありましたか？**

■南さん

いつもと違う環境にいるという高揚感もありますが、9ヶ月も暮らしていればその環境にも慣れてきます。アメリカの生活がノーマルになったところに日本へ帰国すると、日本という国やそこでの生活を複数の視点から俯瞰的に見られるようになるのが面白いですね。旅行で日本を離れて戻ってくるのとは違う新鮮な感覚です。海外で暮らすというのは、新たな視座を自分に与えてくれるんだと思います。

帰国して改めて思うのは、20年暮らしてきた日本の雰囲気や慣習が自分には合っているということ。馴染むというか。海外での生活を経験してみて「海外で働きたい」と思う人も多いと思いますが、僕は海外で仕事をするにしても海外進出をしている日本企業で働くなど、日本の発展のために尽力したいという方向性にシフトしていきました。日本人としてのアイデンティティが強くなったといえいいでしょうか。

■伊藤さん

僕は逆に日本の企業よりも海外の企業のほうが合うように思います。

■南さん

好きや嫌いという視点ではなく、日本を客観視できるようになるのは海外生活を経験したからこそです。日本の良いところも悪いところも見えて、深く考えることができるようになるのではないのでしょうか。僕は日本も海外も好きですし、これまで行ったことのないような国で働いてみたいとも思っています。海外が好き、日本が好きというような対立軸ではなく、それぞれに対しての見識が深まりました。

■伊藤さん

本当にその通りで、どちらがいいというような対立的な考え方ではなくて、留学を経験して自分が日本を知らなかったと実感しました。日本にいるとどうしてもみんな考え方の傾向が似ていて、それが当たり前を感じていますが、海外に行ってみてまったく考え方の違う人と会うことは本当に楽しい。それに海外といっても百数十ヶ国あってそれぞれに個性がある。日本と海外という視点で比べることもおかしいですね。

自分はいろいろな人と新しい経験をしながら生活するのが好きなので、どこの国がいいということではなく、さまざまなコミュニティを行き来し、お互いを尊重するような生活が楽しいと思うようになりました。

**先生としては留学を経験した学生に、どんな視点を持ってほしいというような期待はありますか？**

■阿部先生

一橋大学の学生はもともと基礎学力、英語力、問題解決力もしっかり持っています。ただその能力を解き放つことを阻害しているのが、パーフェクトであらねばならない、ミスをしてはならないという意識です。それが足かせになっているような気がしています。

例えばスポーツでも日本国内で戦っている分にはいい動きをするのに、国際試合になると実力を発揮できない。日本のスポーツチームにはそんな傾向がありますよね。その中でも国際試合を重ねて経験を積むうちに、どんなところでも勝てるように成長していく。この流れと留学はとても似てい

と思います。

本学は日本国内であれば名前も通っているし実力も発揮できるでしょう。しかし海外へ出れば一橋大学を知っている人はいない。そんな環境に行っても壁にぶつかりますよね。そして今度はコミュニケーションの場などでもトラブルに遭うかもしれません。でもそこを何とかして乗り越えることで自信がつくと思います。バリアから解き放たれ、元々持っている力を解放する。何でもいいから、開き直ってどんどん進んでいく。それができる自分に気づけば、日本に帰ってきてからの考え方も大きく変わるのではないのでしょうか。

私たちの考える留学プログラムの核はそこなんです。アウェイで実力を発揮できる自信を持つこと、これだけです。もともと力はあるので、教えることは何もありません。殻を破る機会を得ることが留学も目的であってほしいですね。

完璧なコミュニケーションなんて必要ない、人を動かすには熱意とアイデアがあれば何とかなる、取りあえず何でもやってみようということを学んで帰ってくる学生たち。いろいろな意味で新しい自信をつけて帰国していると感じます。

### 帰国した学生さんたちからどんな変化を感じますか？



#### ■阿部先生

これは帰ってきたばかりよりも、もっと長いスパンで見ないといけないと思います。少なくともスペインの企業派遣に行った学生に関しては、仕事と日常生活のバランス、ワークライフバランスみたいな部分に関心を持つようになっていきますね。仕事と自分の楽しみ、その両方を充実させるという暮らしをしているスペインの人たちを

見て、その生活を日本で実現するにはどうしたらいいのかを考える。今まで当たり前と思っていた日本企業の働き方に対して、自分はどうしたいのかを考える方向へ変化しているのを感じます。

#### ■伊藤さん

スペインで働く方々と交流していて、日本の働く環境と何が決定的に違うのか考えました。そこで見たのは生活の余裕のようなもの。例えばスペインでは昼休みが長く、90分くらいあるし、休憩時間も自由に取れる。自分にストレスをかけずに働ける方法を知っていると感じました。仕事と家庭ってはっきり分けて考えるのでもなく、人生を総合的に楽しむということに意識を向けていように見えたんです。自分の人生なんだから、仕事も暮らしも楽しい方がいいですよね。

#### ■阿部先生

仕事と遊びの間を柔軟に行き来して最終的に人生としてバランスを取っていくことで、仕事の効率も上がっていくのではないのでしょうか。海外でこういう視点を学んでくることで、自分に合った働き方を考え、その結果日本でもどこの国でもいいんですが、自分の実力を発揮できればハッピーになれるはず。実現するのは難しいですが、ぜひ頑張ってくださいね。

### 留学した方々は、卒業後どんな環境で働いていますか？

#### ■南さん

ちょっと変わった人が多いという印象がありますが、全体的に考えると外資系の企業に行く人が多いと思います。僕は外資系のメーカーに就職が内定していますし、友だちではコンサルや外資系の証券会社に行く人もいます。

## 南さんは就職先を選ぶ際に核としていた考え方などありますか？

■南さん

特に外資系にこだわりがあったわけではありません。先ほど言ったように、僕自身としては日本企業の海外進出に貢献したいという思いもあります。しかし留学して5月頃に帰国すると、日本の企業に関しては就職活動がもう始まっていてエントリーできない企業もあります。そのため結果として採用活動が画一的ではなく融通が利くところにアタックすることになるんです。帰国後の面接やアメリカからのスカイプ面接などに対応してくれる企業となると、どうしても外資系が多くなってしまいます。

■阿部先生

留学経験を生かせる環境で働きたいと思っても、日本の企業だと実際に会社に入って配属されてみないとどんな仕事ができるかわからない。それなら外資系の企業をはじめ、日本にベースを置いて海外にもアクセスできる仕事環境を選ぶ、という考えを持っているようですね。いわゆるガチガチの日本企業に就職する人はいないです。採用を担当する人事の方が留学に理解のある会社だと、留学経験が生かせる仕事に配属されるようなこともあるかもしれませんね。

## 留学をしていると、希望する企業の選考時期と学生の帰国のタイミングが合わないこともあると思います。みなさんどんな就職活動を行っているのでしょうか。

■阿部先生

東京では毎年6月に留学生を対象としたキャリアフェアが行われています。このイベントに集まってくる企業は、留学している学生の事情もわかっているし、グローバル人材を求めるのならこの機会を重視しようという考えもあります。

■南さん

東京でのキャリアフェアもそうですが、ボストンで行われるキャリアフェアもありますよね。

■阿部先生

長期留学をする学生にとっての就職活動は、11月にボストンで行われるキャリアフェアと、帰国してからのキャリアフェア、就職活動の大きな山場はこの2回だと思います。実力のある本学の学生たちは、この2回のチャンスで内定をつかんでくることが多いですね。

## 大学に進学したら留学をしてみたいと考えている高校生へアドバイスをお願いします。

■伊藤さん

高校生のうちは留学するチャンスに巡り会うことができる人って少ないと思うので、なかなか留学の実情に対するイメージはわからないでしょう。僕から言えるのは、留学って常に主体性が求められるということです。周りの人たちと自分の違いに気づき、そこで何ができるかを考え、行動するのが重要になります。海外の大学の授業では、ディスカッションが多く、挙手をして自分から発言することが求められるということもその一例といえるでしょう。

また海外で生活するのに欠かせない英語力の話をすると、基本的な文法や単語力と会話力、どちらが大事かと永遠の議論が起きますが、個人的には文法や英単語力というのは自分から努力をしないと身につかないもの。その基礎力を磨くことを怠ってはいけません。自分は大学2年生になるときに海外からの留学生が多く住む寮で、彼らのサポートをするボランティアをするようになったのですが、スムーズに会話ができるようになるのに1年くらいかかりました。これは早い方だと言われますが、中学や高校時代に必死に文法や英単語を頭に入れてきたからこそできたことだと思います。基礎がないままでポンと話すのは無理です。だから学校での勉強はちゃんとやらないとダメですよ。会話に文法なんて必要ないという考え方は違うと僕は思います。

留学で英語力が得られることはもちろん大きいのですが、どちらかというと英語が不完全であって

も話は通じるという自信がつくことが重要。その少しでも通じる機会を増やすには、基礎的な勉強が欠かせないのです。どうせ留学するんだから学校で英語の勉強はしないでいいという考えは見当違いで、やることをやってから行かないと楽しく過ごせませんよ。

受験勉強ももちろん大切ですが、高校1年くらいならまだ時間に余裕もあると思うので、何でも興味のあることを、ときには興味がないようなことにもチャレンジしてください。経験の幅を広く持つことは、後になって役に立つはずですよ。

#### ■南さん

伊藤くんの話と同じになってしまいますが、僕が言いたいことは2点あります。まず、英語をやりたい、英語を使いたいという人っておそらくスピーキングができることを目標にしているのだと思います。そのスピーキングには文法や語彙などの基礎が必要です。この基礎をインプットするために、学校での英語の勉強をしっかりがんばってください。でも文法や語彙が不十分でも、スピーキングの勉強はできます。今はオンラインの英会話プログラムなどがありますよね、そういうものにチャレンジしてみるのも有効です。ひとりで壁に向かって話しかけても続きませんからね。僕の経験上。それよりはオンライン英会話で外国の方と話してみても、会話する喜びを感じることもいいと思います。

そして二つめは少し抽象的な話ですが、いろいろなことを知る大切さに気づいてほしいということです。新しいことを知るのは楽しいですよ。それなら留学というと挙がりやすいアメリカやイギリス、オーストラリアだけに留まらず、もっと広く、例えばメキシコやアフリカなんかも視野に入れてみるのはどうかなって思うんです。英語圏に留学するのがかっこいいというイメージを無批判に受け入れる必要はないはずですよ。なぜ他の国に目が向かないかというと、それは情報が少ないからなのではないでしょうか。僕はメキシコには言ったことがあるのですが、想像しているよりも平和ですし、夜9時や10時でもひとりで地下鉄に乗れます。こういう生の声をキャッチできるようなところへセンサーを張って、留学は英語圏だけじゃないという知見を広げていったら楽しいのではないのでしょうか。英語以外の言語が話せる、珍しい国に行ったことがあって友だちがいる、そんな希少性のある人間になったら面白いし、周りも面白いと思ってくれるかもしれません。知識がなければアメリカ、イギリスに行くという選択肢しか持てないけれど、英語以外の言語を学ぶ道もあるし、英語を使う国は世界各地にたくさんありますよ。

#### ■伊藤さん

そうなんですよ。英語圏に行けばもちろん英語を話すことにはなりますが、他の国に行っても留学生同士のコミュニケーションは英語で行うことになるから英語を話さないといけない環境にあります。英語を話したいのなら、社会的にはちょっとマイノリティな国に行くこともメリットだと思います。自分はこれから派遣留学でイタリアに行きますが、イタリアに留学したという経験が必要とされる場もあると思います。一橋大学の留学プログラムでは英語圏以外の国に行くことも可能です。



#### ■阿部先生

さらにお伝えしたいのは、言葉だけに依存せずにコミュニケーションを取って友だちを作るということは、どんな国に行っても重要だということ。僕は学生たちによく言うんです、スポーツ、音楽、料理、この3つのうち一つでもマスターしていると、言葉を越えた交流ができるから身につけるといいよ、って。言葉はコミュニケーション手段の一部であって、コミュニケーションそのものはもっと人間的な泥くさいもの。そのコミュニケーションの入口となる手段をひとつでも持っていれば、現地で強いですよ。

■伊藤さん

寮でパーティをすることがあるのですが、ダンスができる先輩がいるんです。日本だと中学や高校生のうちからダンスをやっている人って少ないじゃないですか。でもパーティの場においては彼がキングなんです。踊れて、女の子をリフトできて。そういう場面を見ると、小さいときからやっていることって生かされるんだなって感じました。僕は音楽もあまり知らないので、パーティで上手く音楽に乗れないのに……。

### お二人の今後の目標などを教えてください。

■南さん

以前ベトナムに行ったとき印象に残ったことがあります。ベトナムの街にはホンダのバイクが走り、トヨタやソニーのロゴも街中で目にする。案外日本の企業って海外で認められているんだな、バブル以降プレゼンスが下がっていると聞かされて育ったけれどそんなことはないんだって感動したんです。そしてこんな気持ちを後の世代にも残してあげたいと思いました。卒業後の就職先はアメリカに本社を持つ企業の日本支社ですが、いずれは国際的な日系企業で働きたい、もしくはあまり知られていないけれど大きな可能性を秘め多日本企業の国際進出をサポートしたいと考えています。この考えはベトナムやカンボジアに行くまでは明確になっていませんでした。高校時代は漠然と商社に入ろう、くらいのことを考えていたんですよ。

■伊藤さん

自分はずっとマスメディアに興味をもっているんです。メディアの仕事って何でもないことを文字化して、人間の脳にデータとして入れていくことだと思っています。例えばウサインボルトは現在世界で最も足が速い人ですが、彼が大会に出場していなければ、その速さを誰も知らない。野原を走っているだけなら記録にも残らない。逆に言えば日本にウサインボルトよりも速い人が、公園を走っているかもしれないじゃないですか。その誰も知らなかったことを伝えていくのがニュースの仕事で、それはとても面白いことだと思い、マスメディアに興味を持ちました。しかしもっと知らないといけないことがたくさんあると考えるようになってしまい、いい意味で将来の目標がゼロに戻ってしまったのが現状です。スペインでの研修を経て、今度はイタリアへ行って、もっと世界がどう動いているかを知りたいと思っています。

■阿部先生

留学を経て想像がリセットされたんだね。

### 一橋大学の留学プログラムは今後どのように発展していくのでしょうか。

■阿部先生

僕はあと10年で退職することになるので、それまでには伊藤くんがやっている学生寮での留学生サポートスタッフを授業としてプログラムマップの中に入れたいということは考えています。

■伊藤さん

寮のスタッフには留学と同じような効果があると思います。そもそも学生寮なので家賃も安いですし、渡航費もかかりませんしね。寮に住むだけで、留学しているのと同じような感覚を得られたと自分でも感じています。ルームシェアなので、ドアを開けたら誰も日本語を話さないんですから。経験が積めるし、日本での部活も続けられるし、本当に価値のあるものだと思います。

■阿部先生

伊藤くんの言うようにこれだけの効果があるものなので、授業としてのプログラムに発展させたいです。今はその準備をしている最中です。

その他、留学のプログラムを整備して10年、現在の形が一つの完成形になってきたと思います。ステップアップのプログラムには今変化を加えているところで、シンガポールとカンボジアを一週

間ごとに体験するプログラムがもうすぐ始まります。アジアの文化の幅の広さをセットで体験できるようなプログラムになるでしょう。このような体験型のプログラムをもう少し充実させていく計画をしています。参加できる人数も増えるはずですよ。これを呼んでいる高校生が大学に入学するころには、現在の環境をより発展させたプログラムが増えていますよ。

### ●インタビューに答えていただいた方々●



#### ■阿部仁先生

一橋大学国際教育センター長 准教授

Buena High School, Sierrav Vista, AZ 出身。

University of Minnesota Liberal Arts 学部 Journalism 学科 卒業。Western Michigan University Counseling in Higher Education 研究科博士課程修了。2010年2月より一橋大学国際教育センター准教授。2016年2月より同大学国際教育センター長。



#### ■南忠宏さん

一橋大学経済学部4年生(2016年度取材当時)

京都府私立洛星高等学校出身。

大学在学中は2014年8～9月にニュージーランドへ海外語学研修として短期留学。その後2015年9月～2016年5月にアメリカシガン大学へ派遣留学。卒業後は外資系メーカーへと就職予定。



#### ■伊藤一成さん

一橋大学経済学部2年生(2016年度取材当時)

埼玉県立浦和高等学校出身。

2017年2～3月の5週間、短期海外研修としてスペインのマドリッドへ企業派遣に参加。2017年秋から半年間、イタリアへ派遣留学予定。